

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月18日現在

機関番号：37125

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592633

研究課題名（和文）高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの構築

研究課題名（英文）The Construction of a Nursing Intervention Model Which Promotes Self-Care Reconstruction of Higher Brain Dysfunction Patients

研究代表者

日高 艶子（HIDAKA TSUYAKO）

聖マリア学院大学・看護学部・教授

研究者番号：50199006

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの試案を検証することにある。本モデルは、注意障害、観念失行、半側空間無視、自発性の低下に対する介入の順序性と、環境調整と主意的役割の活用という二つの介入方法を提示し、期待できる効果の程度について示したものである。本研究においては、複数の高次脳機能障害を呈した8名の患者に対して検討した。その結果、介入の順序性においては、まず注意の集中を維持することで、患者の行動が安定し、それに伴い抑制障害や半側空間無視の改善を認めた。介入方法においては、視覚・聴覚刺激を減少した個室環境が注意機能の持続や配分に有効であった。主意的役割を用いた介入は、自発性の低下をきたした3事例において有効であった。さらに、注意障害、半側空間無視、記憶障害の介入としても効果が期待された。今回は得られたデータに限りがあるため、今後もモデルの検証に向けて研究を継続する必要がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine a tentative nursing intervention model, which promotes self-care reconstruction of higher brain dysfunction patients. This model presents the sequential order (priority) of interventions and two methods of intervention (environmental coordination and the use of “voluntaristic role”) in attention disorder, apraxia, unilateral spatial neglect, and apathy. We also tried to show the expected degree of effectiveness of the intervention above. The subjects of this research are eight patients who developed several symptoms of higher brain dysfunction. The results are: as for the sequential order (priority) of interventions, keeping patient's concentration level first of all has made the patient's behavior stable, and then we recognized improvements in disinhibition and unilateral spatial neglect also. As for the two methods of intervention, an environment of private room (in which visual and auditory stimulation were decreased) was effective in maintenance and distribution of attentional function. The intervention method using “voluntaristic role” was effective in three instances in which patients' apathy, and was expected to have some effect in attention disorder, unilateral spatial neglect, and memory deficits as well. Since the data obtained are limited this time, continued research is required from now on to verify this model.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：医歯薬学・地域・老年看護学
 科研費の分科・細目：リハビリテーション看護学
 キーワード：リハビリテーション看護学、高次脳機能障害

1. 研究開始当初の背景

高次脳機能障害とは、人が社会生活を営むうえで重要な言語、物や空間の認知、目的を持った行為、注意、遂行機能などの高次脳機能が脳血管障害や頭部外傷などを主たる原因として障害されることをいう。

わが国の高次脳機能障害者数は、宮永(2006)らの報告によると認知症を除くと約27万人とされる。高次脳機能が障害されると、更衣/整容、摂食、入浴/清潔、排泄などのセルフケア不足が起り家庭生活や社会生活が困難な状況となる。

リハビリテーション看護の領域においては、対象者のセルフケアの再構築を看護の目標とする。従って、高次脳機能障害が要因となりセルフケアの不足をきたしている場合は、高次脳機能障害に対する看護介入技術が必須となる。しかしながら、リハビリテーション看護の領域において高次脳機能障害とセルフケアに関する関心が高まったのは、2000年以降であり高次脳機能障害に対する看護介入はいまだ確立されていない現状にある。

このような現状を踏まえ申請者(日高)は、平成20年度に図1に示す高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの試案を提示した。

本モデルは、〈注意障害〉、〈観念失行〉、〈半側空間無視〉、〈自発性の低下〉への看護介入の順序性と環境調整と主意的役割の活用という二つの看護介入の方法を提示し期待できる効果の程度について示した。まず、介入の順序性としては、モデルの最も基礎的部分に位置づけている、認知の基盤である〈注意障害〉に対して介入することで他の高次脳機能障害への介入の準備が整うことを提示した。つまり、環境調整が〈注意障害〉の改善を媒介して〈観念失行〉や〈半側空間無視〉、〈自発性の低下〉に働くことが予測される。

介入方法の環境調整と主意的役割の活用は、四つの高次脳機能障害に何らかの効果をもたらすが同時に効果が得られるわけではない。環境調整の場合は、太線で示しているように、視覚、聴覚刺激を制限する必要がある〈注意障害〉に対して、明らかな効果を認めた。また、〈観念失行〉事例においても自宅環境という環境の効果が行為の遂行を促すという結果を導いた。

主意的役割の活用は、〈自発性の低下〉事例に顕著な効果を認めた。また、〈半側空間無視〉の探索行動を促す際にも効果的であっ

た。ここでいう主意的役割とは、主観的な観点から位置づけられた主観的意味付与がなされた役割をいう。

主観的意味とは、マックス・ヴェーバー(清水訳、1983)のいう「一人の行為者が実際に主観的に考えている意味であり…客観的に正しい意味とか形而上学的に解明された真なる意味とかいうことではない」あくまでもその人の主観的な観点からとらえられることによって生まれた意味と定義する。

したがって、主意主義的観点から人間の行為をとらえる場合、その行為者にとって特別な意味を持つ役割、その人の主観的な観点において特別な価値を有するとみなされている役割、これを主意的役割または、主観的役割と定義する。

本研究においては、提示した高次脳機能障害者のセルフケアを促す看護介入モデルの介入の順序性と環境調整と主意的役割の活用二つの介入方法について検証しモデルの構築を目指している。

本研究において複数の高次脳機能障害を有する患者に対して、介入の順序性を明らかにし、また、主意的役割を用いた看護介入の効果を明らかにすることは、高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促進することが期待されるとともに、他職種でチームを組むリハビリテーションの領域において、看護の役割の独自性を見出す可能性となることが推測される。

また、主意的役割を用いた看護介入の効果は、人間が限りなく社会的存在であることや主意的役割は自己概念の周辺領域ではなく自己概念の中核を占めることが示唆される。

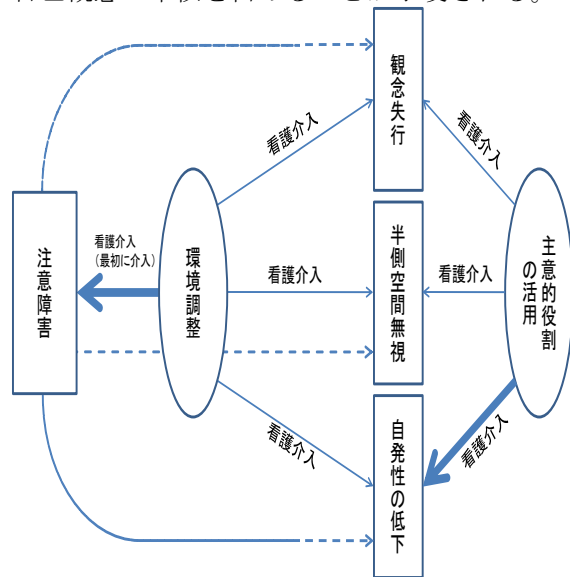


図1: 高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの試案

○ 看護介入方法 □ 高次脳機能障害 ← 介入効果が最も高く出現 ← 介入効果が出る
 ← - - - <環境調整>が注意障害の改善を媒介して他の三つに働くことが予測される

2. 研究の目的

本研究の目的は、図1に示す高次機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの試案を検証し看護介入モデルを構築することにある。本モデルは、注意障害、観念失行、半側空間無視、自発性の低下に対する介入の順序性と環境調整と主意的役割の活用という二つの介入方法を提示し期待できる効果の程度について示したものである。介入の順序性としては、認知の基盤である注意障害に対して最初に介入することで他の高次脳機能障害への介入の準備が整うことを示している。さらに環境調整は注意障害に主意的役割の活用は、自発性の低下に最も効果的であることを示している。本研究においては、提示した介入の順序性と介入方法について検証する。

3. 研究の方法

本研究は、中枢神経系に障害を持つ人を対象としたリハビリテーション病院の協力を得て実施する。介入の順序性を検討するために注意障害とその他の高次脳機能障害を持つ患者を対象とし最初に注意障害に対して、患者がセルフケア行為を遂行する時に視覚刺激・聴覚刺激を減少した環境調整を行った群と行わない群に分類し介入する。評価の視点はセルフケア行為に要した時間と行為遂行過程において注意がそれ回数で評価する。観念失行患者に対しては、セルフケア行為に即した環境での行為の遂行と自宅環境、病床環境の三つの環境下における行為遂行の混乱について評価する。主意的役割の活用については、自発性の低下を認めた患者、半側空間無視を呈した患者を対象とし、介入を試み評価する。

4. 研究成果

1) 介入の順序性と介入方法－環境調整と主意的役割の活用について－

注意障害、左半側空間無視、抑制障害、構成障害、自発性の低下、保続、記憶障害等の複数の高次脳機能障害を呈した患者8名の介入の順序性について検討した。複数の高次脳機能障害を有する患者の介入においては、まず、注意の集中を高め維持することで患者の感情や行動が安定し、それに伴い抑制障害や半側空間無視、保続の改善が認められた。

注意の集中を促す介入方法としては、視覚・聴覚刺激を減少した環境調整の有効性を検討した。特に、食事場面における個室環境の活用は、注意機能の持続や配分に有効であり、看護介入として確立できる可能性が示唆

された。しかし、本介入は看護師のマンパワーを必要とするため、実際に臨床で看護師によってどの程度活用されるか疑問が残るところでもある。したがって、病棟内の食堂等での食事環境においては、注意障害の程度を評価し壁やスクリーン等を活用した環境設定の調整が望まれる。

主意的役割を用いた介入は、自発性の低下をきたした3事例において、患者がこれまでの人生において最も重視していた役割から主婦、教師の役割を、また役割として位置づけることができる趣味活動を用いて介入した結果、自発性の向上を認めた。

また、本研究においては、自発性の低下をきたした患者のみならず、注意障害、半側空間無視、記憶障害の介入としても主意的役割を用いた介入の有効性が示唆された。

注意障害を呈し主婦役割を主意的役割とする患者6名に対しては、感情の安定と注意の持続を目標に主意的役割を用いて介入した結果、多動傾向が軽減し、注意評価スケールの得点も改善した。さらに、注意の持続は、セルフケア不足の改善にもつながった。

半側空間無視を呈した2事例においても同様に、主意的役割を用いて介入した結果、無視側への探索行動が可能となった。

2) 今後の展望

本研究においては、研究期間と対象選定期間、介入方法の選定、介入期間等の関係により得られたデータに限りがあり、統計学的検定の実施が困難であった。従って、提示した高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの検証には至っていない。しかし、モデルを支持する知見を得たため、今後も高次脳機能障害者のセルフケアの再構築を促す看護介入モデルの構築に向けて研究を継続する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計11件)

- ① 日高艶子、急性期・回復期における高次脳機能障害患者の看護—現状と課題—、第16回日本病院脳神経外科学会シンポジウム、2013年7月20日—21日(発表確定)、福山ニューキャッスルホテル(広島)
- ② 正司貴子、高田直美、日高艶子、中島峰子、注意障害により排泄セルフケア不足をきたした患者の看護—趣味を用いた介入の検討—、第24回NPO法人日本リハビリテーション看護学会、2012年11月

- 10日、大阪商工会議所（大阪府）
- ③ 小浜さつき、日高艶子、加隈世志子他 3名、半側空間無視により更衣セルフケア不足を呈した患者への鏡を用いた看護介入の検討―、第24回NPO法人日本リハビリテーション看護学会、2012年11月10日、大阪商工会議所（大阪府）
- ④ 小浜さつき、日高艶子、甲斐田奈々他 2名、前頭葉損傷により自発性低下と保続、注意障害を呈した患者の摂食セルフケア不足に対する看護介入の検討、第10回日本臨床医療福祉学会、2012年11月24日、国立京都国際会館（京都府）
- ⑤ 日高艶子、高次脳機能障害者の看護―その人の役割機能に注目しよう！平成24年度 第1回高次脳機能障がい支援研修会、2012年7月8日、倉吉未来中心（鳥取県）
- ⑥ 石井成美、日高艶子、小浜さつき他 3名、自己尊重の低下をきたした脳卒中患者の看護介入の検討―主婦役割を活用した介入の試み―、第23回NPO法人日本リハビリテーション看護学会、2011年11月5日、別府国際コンベンションセンター（大分県）
- ⑦ 日高艶子、高次脳機能障害の理解と看護、2011年10月23日、日本脳神経看護研究学会主催第7回脳神経看護セミナー、熊本大学医学部総合研究棟（熊本県）
- ⑧ 松尾佐知子、日高艶子、中村真紀、自発性低下の患者に対する看護介入の一考察―患者が重視する役割の活用―、第5回日本慢性看護学会、2011年6月25日、岐阜県立看護大学（岐阜県）
- ⑨ 中島峰子、日高艶子、戸島早織、大久保智美、中村真紀、注意障害により更衣セルフケア不足をきたした患者への看護介入の一考察―主婦役割の中の食器洗いを活用して―、第22回NPO法人日本リハビリテーション看護学会、2010年11月13日、兵庫県立文化体育館（兵庫県）
- ⑩ 小浜さつき、日高艶子、大塚奈都希、東原まり他、左半側空間無視患者に対する看護介入―トランプの七並べを活用したトレーニングの一例―、第8回日本臨床医療福祉学会、2010年9月4日、水戸プラザホテル（茨城県）

- ⑪ 上田真優、福留衣那、小浜さつき、日高艶子他、構音障害患者に対する看護介入の一考察―患者の趣味を手がかりとした介入の試み―、第8回日本臨床医療福祉学会、2010年9月4日、水戸プラザホテル（茨城県）

〔図書〕（計1件）

- ① 日高艶子監修、メディカ出版、セルフケア再構築の成功事例から学ぶ！脳卒中リハビリテーション看護 Case Study、2011、1-159. 宮林郁子担当部分 9-18.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日高 艶子 (HIDAKA TSUYAKO)
 聖マリア学院大学・看護学部・教授
 研究者番号：501990006

(2) 研究分担者

宮林 郁子 (MIYABAYASHI IKUKO)
 福岡大学・医学部・教授
 研究者番号：40294334

(3) 連携研究者

()

(4) 研究協力者

金山 萬紀子 (KANAYAMA MAKIKO)
 誠愛リハビリテーション病院・副院長

中村 真紀 (NAKAMURA MAKI)
 誠愛リハビリテーション病院・福祉部部长

吉村 綾子 (YOSHIMURA AYAKO)
 誠愛リハビリテーション病院・看護部次長

中島 峰子 (NAKASHIMA MINEKO)
 誠愛リハビリテーション病院・看護部課長

戸島 早織 (TOSHIMA SAORI)
 誠愛リハビリテーション病院・看護部課長

松尾 佐知子 (MATSUO SATSIKO)
 誠愛リハビリテーション病院・看護部係長

林 由香 (HAYASHI YUKA)
 誠愛リハビリテーション病院・看護部係長

小浜 さつき (OBAMA SATSUKI)
 聖マリア学院大学・看護学部・助手
 研究者番号：20580731